

ヨハネによる福音書18章18～27節

●今日のヨハネによる福音書に「世はあなた方を憎む」という言葉がある通り、この福音書が書かれた時代、キリスト者たちは厳しい迫害を受けていました。そしてその迫害の中をイエス様の言葉と愛を思い起こしつつ何とか生き抜いていたのです。

●日本でもキリシタン弾圧の時代がありました。加賀乙彦さんの小説「高山右近」は戦国時代の教会の様子を印象深く描いています。そこには迫害が厳しくなりつつあった時代に、信者たちがクリスマスに密やかにノアの箱舟のお芝居をし、この迫害の大洪水もいつか終わり平和が訪れる事を願っていた。そんなけな気な信者達の姿を描いているのです。

いつの時代にも決して抗うことのできない「この世の力」は存在し、自らの内にはこの世に流される思いや、神を信じきれない心があります。そのような人間の弱さ、無力さを抱えつつも主を信じ歩むところに信仰生活の現実があるのです。

●イエス様は今日の箇所です。弟子たちに「あなた方は世に属していない。私があなた方を世から選び出した」と言われました。これは、弟子たちが完全にこの世から切り離されてイエス様のように深い愛と信仰を持つ者となっていたという事を意味しているのではありません。彼らはこの世の力に怯え、この世の価値観を拭いきれず、失敗や過ちを犯し、十字架を前にして逃亡するような存在だったのです。

しかし弟子たちは後にイエス様の生き様と「復活」によって、「この世は皆、神を憎み、捨てたが、神はこの世を愛し、決して捨てないのだ」、という「福音」に触れて変えられていったのです。この世に属し、この世の葛藤や悩みを深く味わった弟子達だからこそ、深い神の愛に応え、それを証する歩みへと導かれていったのだと言えるでしょう。

●加賀乙彦さんは小説の中で高山右近をこの世離れした「信仰の英雄」として描きませんでした。あの戦国の世にあって迷い悩みながら、そして自らの罪を許すイエスキリストの愛と恵みを思い起こし、誠実に信仰の道を歩もうとした一人の信仰者として描いているのです。高山右近はあの戦国の世に生きたからこそ、「剣によって立つものは剣によって滅ぶ」というイエス様の言葉に真理を見出し、またその世の力に押し流されて罪を犯してきたという自覚があったからこそ、イエス・キリストへの硬い信仰が生まれ、その晩年に豊かな実りを生み出していったのです。

●今、礼拝に預かっている私たちも完全にこの世から離れて清らかに生きることのできない一人一人であることを告白せざるを得ません。しかしそんな私たちに復活のイエス様は「そんなあなたを私は愛し、選び出したのだ」と語りかけ、聖霊の力によって真の愛や平和を切望し、それを実現する者とならせてくださるのです。その事を信じて共に歩んでまいりましょう。